台大日本語文研究第 39 期
2020 年 06 月，頁 49-74
2020-04-03 收稿，2020-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202006_(39).0003

村上春樹《神的孩子們都在跳舞》中的暴力
—以〈有熨斗的風景〉・〈泰國〉為探討文本

范淑文*

摘要

1995 年阪神大地震後，村上春樹創作的短篇小說集《神的孩子們都在跳舞》常被拿來與震災或之後發生的地鐵沙林毒氣事件的關聯與否作為議題討論，評價不一。

加藤典洋將阪神大震災與地鐵沙林毒氣事件的關聯性納入研究議題，除了將「暗示奧姆真理教與地鐵沙林毒氣事件的存在」視為整篇作品的架構之外，並在各短篇作品中找出「各腳色與父母親的關係，尤其是父親關係的主題首次在村上作品中出現」共通的主題。

「與父母親的關係」色彩最為鮮明的作品要屬〈有熨斗的風景〉和〈泰國〉兩篇短篇作品，前者指的是主角順子內心對父親不愉快的記憶，後者雖然並沒有清楚的敘述，但是從中可以窺見主角五月深藏於內心的傷痛是跟相當於「父親」的人物有關。那份不愉快或是內心的傷痛都可視為是一種「暴力」，〈有熨斗的風景〉和〈泰國〉是有其共通之處，因此，在本論文中首先檢視兩篇作品中充斥的暴力、暴力的表現方式以及主人公如何面對該暴力等，進而分析探討作品中以何種形式訴諸該社會問題。

關鍵詞：《神的孩子們都在跳舞》、〈有熨斗的風景〉、〈泰國〉、暴力、社會問題

* 國立台灣大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Violence of “After the Quake” from Haruki Murakami with“Landscape with Flatiron” and “Thailand”

Fan, Shu-wen*

Abstract

The collection of short stories “After the Quake” was published after the 1995 Han-Shin Awaji Earthquake Disaster. It has received a variety of evaluations, e.g., whether it is associated with the earthquake disaster as well as Sarin Incident (Tokyo Attack) occurred afterwards or not.

In addition to comprehending the whole structure of the collection of short stories with “suggesting that the existence of AUM and Subway Sarin Incident” etc.based on the consideration of the association with Han-Shin Awaji Earthquake Disaster and Sarin Incident, Norihiro Kato found another topic which is fundamentally common among each short story of “After the Quake” as the common of “Relationships with parents as characters, particularly focusing on the relationship with the father to show a new topic of genealogy.

Furthermore, apropos of Haruki Murakami’s works depicting “the relationship with parents” most clearly are “Landscape with Flatiron”and “Thailand”.The former is Junko’s unpleasant memory with her father, while the latter is showing the trauma of Satsuki toward the character who is equivalent to her father” as not expressing clearly. In view of regarding the unpleasantness and trauma as a kind of violence, the study focused on social problems appealing in various works based

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

on the consideration of the violence and its expression way, corresponding of main characters and so on.

Key words: “After the Quake”, “Landscape with Flatiron”, “Thailand”, Violence, Social Problems

臺灣大學學術期刊資料庫

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』にみる暴力
—「アイロンのある風景」と「タイランド」を中心に

范淑文*

要旨

1995 年の阪神淡路大震災の後、村上春樹が執筆した短編集『神の子どもたちはみな踊る』は、震災やその後に起きたサリン事件との関連性の有無がよく言及され、その評価は様々である。

加藤典洋は、阪神淡路大震災及び地下鉄サリン事件の関連性も考察の射程に入れて、「オウムと地下鉄サリン事件の存在を暗示している。」と、短編集全体の構成を読み取るほか、「登場人物における親との関係、とりわけ父との関係をめぐる、新しい主題の系譜がここに登場している」と、各短編に通底しているもう一つの主題を見出している。

その「親との関係」が最も鮮明に語られている作品と言えば「アイロンのある風景」及び「タイランド」の二作が挙げられる。前者では順子の中にある父親への不快の記憶、後者でははっきり言明されてはいないが、主人公さつきが抱えていた心の傷は「父親」に相当する人物とかかわっていることが伺える。その不快や心の傷を一種の「暴力」と見なせる点で、「アイロンのある風景」と「タイランド」は相通じているため、両作品に漂っているその暴力やそれらの表し方、主人公の向き合いなどを考察したうえ、如何なる社会問題としてそれぞれの作品の中で訴えられているかを明らかにするのを小稿の主旨とする。

* 国立台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

キーワード:『神の子どもたちはみな踊る』、「アイロンのある風景」、
「タイランド」、暴力、社会問題

臺灣大學學術期刊資料庫

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』にみる暴力—「アイロンのある風景」と「タイランド」を中心に

范淑文

一、はじめに

1995 年 1 月の阪神淡路大震災の後、村上春樹が執筆した短編集『神の子どもたちはみな踊る』[1]（以下は『神の子どもたち』と略称する）には、丹生谷貴志の「『地震』によって生じた表象の危機を巡る連作」であり、「非常に緊密で秀逸な感動的作品」という絶賛[2]があるかと思えば、福田和也の「天災の、自然の他者性は一切棄却されて、すべて内面化されている」[3]というような批判もあるように、その評価は様々である[4]。また、加藤典洋は、「単行本刊行時のタイトル「神の子どもたちはみな踊る」は、こちらの共通枠としての、

1 「UFO が釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」の五篇は 1999 年 8 月より『新潮』に相次いで連載され、さらに書き下ろしの「蜂蜜パイ」が後から付け加えられ、2000 年 2 月に『神の子どもたちはみな踊る』のタイトルで単行本として刊行された。

2 丹生谷貴志「壜の中のメッセージ」『文藝』2000.5

3 柄谷行人との対談で「天災の、自然の他者性は一切棄却されて、すべて内面化されている」と福田和也が酷評している。柄谷行人・福田和也、対談「現代批評の核」『新潮』2004.8

4 椹木野衣は「それぞれの作品の設定として、近い過去に神戸で大きな地震があったことが想定されている」（椹木野衣「春が来る前に——村上春樹の新作を読む」『新潮』97 号、新潮社、2000.4、PP.238−241）と地震との関連性について触れている。また、中山幸枝も地震との関連性について以下のように指摘している。「『神の子どもたちはみな踊る』は、 どうしても当初の総題「地震のあとで」と、プロットに織り込まれた阪神大震災が脳裡をよぎるために、『神の子どもたちはみな踊る』＝地震をめぐる作品集」という構図を描いてしまいがちである（後略）」（中山幸枝「村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論——「あちら側」と「こちら側」の狭間に位置する青年——」『近代文学試論』44 号、広島大学近代文学研究会、2006.12、PP.87-97）一方、堀江敏幸は「「地震」はたしかに連結装置のひとつである。だがじつのところそれは必ずしも現実のものでなくとも、「あの」地震でなくてもかまわないのであり、私たちの存在の根幹にかかわる想像力の世界、もしくは現実と密接につながる想像の世界をゆるがす微動が伝わってくればいいのだ。」と連作の成功を主張している。堀江敏幸「もう神さまに電話はできない」『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第 32 巻第 4 号（通巻 429 号）3 月臨時増刊号、2000.3、青土社、P.213

臺灣大學學術資訊網

オウムと地下鉄サリン事件の存在を暗示している。」[5]と、阪神淡路大震災及び、ほぼ二ヶ月後に東京で起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件の関連性[6]も考察の射程に入れて、短編集全体の構成を読み取るほか、「登場人物における親との関係、とりわけ父との関係をめぐる、新しい主題の系譜がここに登場している」[7]と、各短編に通底しているもう一つの主題を見出している。加藤氏のいう「親との関係」、つまり長年作者自身の中に蟠っている父親との葛藤の投影という捉え方には一部の作品においては賛成する。が、例えば、第一作目の「UFOが釧路に降りる」は親より夫婦の問題が鮮明であり、「親との関係」を連作のつながりとしては徹底していないため[8]、本論文では家族、殊に親との関係が最も鮮明に語られている「アイロンのある風景」と「タイランド」の二作に焦点を絞って考察することにした。前者では主人公順子の中にある父親への不快の記憶が軸で、後者では、主人公さつきが抱えていた心的傷害について、「彼女は自分がゆるやかに死に向かっていることを認識した。」「彼女は一人の男を三十年間にわたって憎み続けた。」（P.192）というさつきの心の底にある恨み、「継父」に相当する人物に対する恨みなどの記憶が強く語られていることがうかがえる。ぎりぎりのところまでの境地に立たされた表現が用いられている点のみならず、恐怖、絶望、及び憎しみなどが互いに絡んでいる心境という両作品の共通している点に注目し、加藤氏の「親との関係」に関する研究を踏まえながら、それらの心境に至った経緯や根源を探り、そのような心的傷害に主人公がいかに向き合っているかなどの問題を明らか

---

5 加藤典洋『村上春樹　イエローページ　PART2』2004.5、荒地出版社、P.109

6 加藤典洋のほか、鈴村和成も地震とオウム真理教の両事件とモチーフとの関連性について言及している。鈴村和成「村上作品の最近の黙示録的語調について」『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第32巻第4号（通巻429号）3月臨時増刊号、2000.3、青土社、PP.50-61

7 加藤典洋、上掲書、P.109

8 ほかには「かえるくん、東京を救う」は兄弟関係の設定を通して主人公が抱えていた自己の内面の省察として読み取れる。そして、「神の子どもたちはみな踊る」は親との絆が問題の核としても読み取れるが、最終的には個の根源への追及が焦点になっている。最終作の「蜂蜜パイ」は家庭問題を通して個を見詰める作品として捉えられる。

臺灣大學圖書館

にしていく。

二、「アイロンのある風景」にみる暴力

家で父親との「不愉快」やそれにつながる不登校及び人間関係の行き詰まりで家出をした順子はその後啓介という青年と同棲し、そのアパートの近所のコンビニでアルバイトをしているうちに、独り暮らしをしている三宅という画家と知り合った。浜辺に流れてきた流木を集めて焚火をする「趣味」を持っている三宅は焚き火の条件が満たした時、順子を誘い、そこで丹念に積み上げた流木に慎重に焚き火を起こし、それぞれ受けてきた心的傷害を回想しながら焚火の時間を一緒に楽しむのである。ある日、生と死という深刻な問題についての語り合いで、焚火が消えた時に死のうと二人で約束したが、順子が三宅の肩に寄りかかっている中、「深い眠りに落ちた」ところでストーリーが終わっている。

三宅も順子も焚火をしているさなか、それまでの不快な思い出や苦しい記憶をぽつぽつと語っている内容が作品の軸となっている。以下は、物語に織り込まれているジャック・ロンドンの『たき火』の働きを明らかにしたうえ、二人の会話や回想の内容などを考察しながら、順子と三宅それぞれが受けていた不快、心の傷やその根源に迫っていく。

（一）ジャック・ロンドンの『たき火』の働き

燃えていく焚火を二人でじっくりと眺めているうち、順子は「いつものようにジャック・ロンドンの『たき火』のことを思った。」という設定は意味深い。順子は「アラスカ奥地の雪の中で、一人で旅をする男が火をおこそうとする話だ」（P.134）と内容について語っている。川崎賢子と川本三郎の「ふたりの春樹」と題した対談で川本三郎は、「普通、ジャック・ロンドンを語る際に、この作品を持ち出さないですよ。実は、私はジャック・ロンドンの『放浪記』の翻訳をしているんですけれども、この作品の存在を恥ずかしながら知らなかったんです。へえ、ジャック・ロンドンがこんないい小

臺灣大學學術期刊資料庫

説を書いていたのかと思って。」[9]と「アイロンのある風景」に織り込まれている『たき火』の真実性に言及している。『たき火』の主題についてであるが、高校一年生の時に順子が書いた感想文の一節に注目してみよう。

> 死の瀬戸際にいる男の心臓の鼓動や、恐怖や希望や絶望を、自分自身のことのように切実に感じとることができた。でもその物語の中で、何よりも重要だったのは、基本的にはその男が死を求めているという事実だった。（中略）この旅人はほんとうは死を求めている。それが自分にはふさわしい結末だと知っている。それにもかかわらず、彼は全力を尽くして闘わなくてはならない。生き残ることを目的として、圧倒的なるものを相手に闘わなくてはならないのだ。（中略）しかし順子にはわかっていた。間違っているのはみんなの方なのだ。だって、もしそうじゃないとしたら、どうしてこの話の最後はこんなにも静かで美しいのだろう？（PP.134、135）（傍点原文、下線部引用者。以下同じく）

とても女子高校生、しかも小説を読まない高校生の捉え方とは思えないが、上掲の川崎賢子と川本三郎の対談で川崎賢子は、「何よりも重要だったのは、基本的にはその男が死を求めているという事実だった、というところでそのような「根元の矛盾性」を了解してしまう少女のジャック・ロンドン理解。」[10]と指摘していながら、そうした描写手法こそが、村上春樹の小説の「リアリズムの小説ではない」と見なし、川本氏と意見が一致している。原文の真意はどうであろうかはともかくとして、川崎氏の指摘のとおり、「アイロンのある風景」における主人公順子のジャック・ロンドンの『たき火』への捉え方は大切である。「男が死を求めているという事実だった」という理解のほか、その続きの「それにもかかわらず、彼は全力を尽くして闘わなくてはならない。生き残ることを目的として、圧倒的なるものを相手に闘わなくてはならないのだ。」という順子の語

9 『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第32巻第4号（通巻429号）3月臨時増刊号、2000.3、青土社、P.39
10 同注9、P.40

臺灣大學學術期刊資料庫

りも意味深い。「死を求めている」とは矛盾しているように見えるが、それについて後で述べる。

「私ってからっぽなんだよ」(P.148)「ほんとに何もないんだよ」「きれいにからっぽなんだ」(P.149)と苦悩の心境を吐露した順子に、「今から俺と一緒に死ぬか？」と三宅が一種の「死への誘い」をしてみる。ジャック・ロンドンの『たき火』の旅人が「死を求めている」という順子の捉え方への共鳴のように三宅が死への姿勢を見せている。言い換えれば、ジャック・ロンドンの『たき火』が三宅、または順子へ「死を求めている」姿勢の示唆として物語に織り込まれていると捉えられよう。

（二）順子が受けていた心的傷害

主人公順子と三宅の行動や語りの内容をストーリーに沿って整理してみれば、次の通りになる。

（儀式のような）焚火を起こす→　ジャック・ロンドンの『たき火』を連想　→　『たき火』の主人公が「死を求めている」という主題の提起　→　順子・三宅が不快や苦悩を語り合ったのち、「死」に向かおうと二人で約束を　→　順子が三宅の腕に抱かれたまま「深い眠りに落ちた」

以上のプロセスから、ジャック・ロンドンの『たき火』が「アイロンのある風景」の一つの暗示として織り込まれているのは明らかであろう。「死」に向おうとして、三宅が順子と一緒に一つの儀式を行うように焚火を起こしている。ただし、『たき火』の主人公は子供たちのキャンプ地に向かうまでは耐えられないほどの寒いところを通過しているなか、火を起こすことを繰り返したが、とうとう寒い地で死んでしまった。

一方、順子たちは『たき火』の主人公とは逆順に進んでいく。焚火の暖かみ及び三宅の腕の温かみの中で順子は「深い眠りに落ちた」(P.150)。肝心なのは、『たき火』では、「死を求めている」とはいえ、「生き残ることを目的として、圧倒的なるものを相手に闘わなくてはならないのだ。」という主人公の戦う姿が主題となってい

臺灣大學學術期刊資料庫

る。それに対して、「アイロンのある風景」においては、「死」に向かうとは言いながら、苦闘する姿の描写ははっきりしない。それは順子にしても三宅にしてもこの町に来るまでの人生と関係がある。

順子は「生理が始まり、陰毛がはえ、胸がふくらみだしてから」、子供のころ仲が良かった父親が「それまでとはちがった奇妙な視線で彼女のことを見るようになった」（P.138）と、心の不快、恐怖感がはっきりと語られている。おまけに、高校に入っては成績が悪くなったことで学校に行くのは「苦痛以外の何ものでもなかった。」（P.138）と回想している。勉強に集中できなかったのは父親からの不快感や不安とは無関係とも限らない。順子が受けた心的傷害はそれほど強烈なものだったのである。

さて、ここで、順子の受けた心的傷害＝暴力、と捉えたいため、本論文で述べている暴力について、改めて確認しておく。暴力とは、通常は「他者の身体や財産などに対する物理的な破壊力」を指している。が、「精神的虐待やモラルハラスメントなどの精神的暴力も暴力と認知されるようになりつつある」[11]と思われている。つまり、肉体の苦痛とは限らないことである。浦澄彬は村上春樹文学について、以下のように暴力を語っている。

> 平和な日常のすぐ内側に、暴力のにおい、死の影は満ち満ちているのである。村上春樹は、かつて初期の作品ではそのことを無意識的ににおわせることに終始した。その反動が、『ねじまき鳥クロニクル』以後の作品においては意識的に、強烈にそれを描こうとしている。[12]

浦澄氏の指摘によれば、身体に加える具体的な力、それによって引き起こす肉体的苦痛という狭義的理解にとどまらず、恐怖や不安をもたらすような空気や雰囲気も暴力の範疇に入ると捉えられよう。また、村上春樹が河合隼雄との対談のなかで、『ノルウェイの森』以

[11] フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9A%B4%E5%8A%9B（2020.06.11 閲覧）
[12] 浦澄彬『村上春樹を歩く――作品の舞台と暴力の影』2000.12、株式会社彩流社、P.58

臺灣大學學術資源發展中心

来、暴力を書くようになり、「セックスと死」しか書いていない『ノルウェイの森』のテーマが暴力と深く関わっていることを認め、「たとえば、いまぼくはこの現実の空気のなかに暴力性を感じますよね。その感じた暴力性を、良い悪いを超えた地点でどのように処理していけばいいのか、ぼくに何かできるのかと考えだすと、非常にむずかしいですね。」[13]と、日常生活の中のあらゆる暴力について語っている。そのような村上自身の「暴力」への言及を合わせて考えれば、腕力などによる身体的傷害のみならず、実体のない空気、あるいは言語や目線など相手に不快、不安を与えるようなものならすべて、「暴力」の範疇に含まれると言えよう。この広義的な定義に基づけば、本論文で考察の対象である「アイロンのある風景」の主人公順子、上述した順子の父親からの性的匂いの目線も「暴力」の一種と見なすことができよう。以下はこうした広義的な「暴力」に従って、論考を続けていく。

その父親から心的傷害、精神的な暴力を受けたためであろうか、40歳位の三宅と一緒にいる時、一種の「愛情」を享受する姿勢がうかがえる。次の焚火の描写に注目してみよう。

> 炎の広がり方が柔らかくてやさしいのだ。熟練した愛撫のように、決して急がないし荒々しくもない。炎は人の心を温めるためにそこにある。（中略）あらゆるものを黙々と受け入れ、呑みこみ、赦していくみたいに見えた。ほんとうの家族というのはきっとこういうものなのだろうと順子は思った。（P.137）

三宅と焚火を起こし、そこで二人でゆっくりと焚火を眺めている心理描写である。焚火の炎は「熟練した愛撫のように」という表現で擬人化されているのみならず、「あらゆるものを黙々と受け入れ」ると順子の目を通して語られている。それゆえに三宅に誘われるたびに、季節や時間を問わず、直ちに海辺へ向かうのである。そして最も意味深いのは「ほんとうの家族というのはきっとこういうもの

[13] 村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000⑦ 約束された場所で村上春樹、河合隼雄に会いにいく』2013、6（2003、11 第一刷）株式会社講談社、P.361

臺灣大學學術期刊資料庫

なのだろう」という、順子の目に映っている炎のイメージである。父親からの心的傷害、精神的な暴力から逃れ、家出をした順子にとっては三宅と一緒にいる時の安堵感や穏やかな雰囲気が炎の暖かいイメージと重なり、それがまさに家族のあるべき姿だと思われているのであろう。

余談になるが、三宅のほうも何らかの暴力に脅かされていたことが三宅の言葉使いに感じられる。ここでは、黒古一夫の「その被害や被害者そのものへ正面から向き合ってそこに生じている問題を表現化することなく、被害地でも被害者でもない人々の心的影響を取り上げるという「ズレ」の方法で地震がもたらした「暴力」を問題にしたのである。」[14]という地震からの間接的な「暴力」説を援用して、三宅に加担した心的恐怖も一種の暴力と捉えたい。神戸出身で子供が二人いる三宅は、神戸の地震で被害を被ったかと聞かれた時、「さあ、ようわからん。俺な、あっちとはもう関係ないねん。昔のことや」（P.136）と言った程度の答え以外に、ほとんど触れようとしない。が、そのような昔一緒に暮らしていた家族に対する冷たい説明や、また順子に語った幾つかの夢の内容から三宅のそれまでの生活や心的状況が推測できよう。家庭の経済状況は不明であるが、売れない絵描きである三宅はおそらく家庭では夫としても父親としても居心地がよくなかったと考えられよう。死に向かう夢の繰り返し、また「死人の手」「その手が俺の首をつかんで、すごい力で冷蔵庫の中にひっぱり込」（P.145）もうとする夢などから、具体的には語られてはいないが、三宅も大きな精神的暴力を受けていたのは明らかであろう。

順子の受けた暴力の実質とは異なるものの、三宅も家族あるいは家庭の雰囲気から精神的暴力に脅かされていたことは十分に考えられよう。

[14] 黒古一夫『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』2007.10、勉誠出版株式会社、P.232

臺灣大學學術期刊資料庫

（三）暴力とどう向き合うか

ジャック・ロンドンの『たき火』の主人公が「死を求めている」が、その前の「生き残ることを目的」として、「彼は全力を尽くして闘わなくてはならない。」という順子の解釈のとおり、三宅も順子も終盤の「死」に向かう約束をしたが、それまで、二人ともそれぞれ精神的暴力、心的傷害の影から逃れようと、彼らなりの方法で「全力を尽くして闘」っていたと言える。

「このように村上春樹の文学世界は、生と死の世界が近い、この世と霊魂の世界が近い。」[15]という小山鉄郎の指摘のように、「アイロンのある風景」も従来の村上文学のとおり、一見は生と死の世界を描いている作品のように見えるが、実はその背後にはもう一つの主題が潜んでいるのは明らかであろう。そのような長年心の底に蟠っていた暴力や心の苦痛を、似たような精神的苦痛の経験者三宅と語り合うことを通して、その暴力の根源が少しずつ明らかになってきた。そして、その根源である父親からの精神的暴力、心的傷害の癒しとして、順子は三宅と焚火を眺めながら、その焚火の動きから「熟練した愛撫のように」、「あらゆるものを黙々と受け入れ」る炎のような暖かい「本当の家族」や理想的な家族の在り方を描いているのではなかろうか。

三、「タイランド」にみる暴力

「うまくいけばノーベル賞候補になることだって夢じゃないぞ」（P.178）と同僚に言われるほど優秀な甲状腺の専門医であるさつきは、アメリカ人の夫とうまくいかなくなったこと、更に夫の浮気で三年前に離婚して日本に帰ってきた。夫に言わせれば、さつきは子供を欲しがらないというのが別かれる決め手だったということである。更年期の最中のさつきは、バンコックで開催される世界レベルの甲状腺学会に参加した後、そのまま一人でバンコックに残って一週間のんびりと過ごす。バンコック滞在の短い間、友人が斡旋して

[15] 小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』2010.10、株式会社講談社、P.19

臺灣大學學術期刊資料庫

くれた現地のガイドであるニミットの用意周到な手配のおかげでリゾートホテルで暫しリラックスできた、と言うのが「タイランド」の粗筋である。

バンコックで一週間過ごしている間、主人公さつきのガイドであるニミットとの会話や断片的な回想の内容を以下のように概略的に三つに分けて、テクストから抜粋しておこう。そして、それらの内容に沿ってそれまでさつきの身に起きたことを考察し、そこから彼女の中にある根本的な問題、バンコックでの休暇の意味を解明してみる。

（A）早く亡くなった父親

「やはり医者よ。小児科医。でも私が高校に入って少ししして亡くなってしまった」（P.180）

父親が癌を患って死ぬまでは、彼女のまわりのものごとはすべてうまく運んでいた。悪いことは何ひとつ起こらなかった。それから出し抜けに舞台が暗転し（気が付いたときには父親は消えていた）、すべてが悪い方向を向いてしまった。 (P.181)

（B）30 年恨み続けてきた「あの男」

でもそれは真実ではなかった。神戸にはあの男が住んでいる。(中略)あの男が重くて固い何かの下敷きになって、ぺしゃんこにつぶれていればいいのにと彼女は思った。あるいはどろどろに液体化した大地の中に飲み込まれていればいいのに。それこそが私が長いあいだ望んできたことなのだ。(PP.181、182)

あなたが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあって当然ではないか。(P.184)

（C）アメリカ人の夫

「いちばん決定的だったのは、君が子どもをほしがらなかったことだ」と夫は主張した。（P.177）

「もうずいぶん長いあいだまともには聴いてないわね。結婚した相手がたまたまジャズ嫌いだったの。音楽というとほとんどオペラしか聴かない人だった。家には立派なステレオ装置があったんだけ

臺灣大學學術期刊資料庫

ど、オペラ以外の音楽をかけると露骨にいやな顔をした。」（P.180）

（一）さつきの中にある父親と母親の記憶

上掲したさつきの回想（A）の内容はさつきが高校に上がった時に癌で亡くなった父親への思い出である。父親が死ぬまでは凡てがうまくいき、さつきは幸せであった。その小児科医である父親の影響でさつきはジャズに関することに詳しく、ジャズが大好きになった。しかし、父親が亡くなったあと、周りが急に暗くなり、「すべてが悪い方向を向いてしまった。」(P.181)その原因については具体的には触れられてはいない。ただ、母親についてはほとんど言及されていない点は不思議である。そのことはさつきの人生に何らかの形で関わっていると思わずにはいられない。母親に関する語りを引用しておこう。

・母親は、父親が死んだあと一カ月もたたないうちに、ジャズ・レコードのコレクションと大きなステレオ装置をすべて処分してしまった。（P.181）

・「私の父があっというまに死んでしまったあとで、母は私にはひとことの相談もなく……。」（P.193）

前項の引用文は父親への回想のあと綴った母親への記憶である。その母親は父親が亡くなったあと一ヶ月も経たないうちに、父親の大事にしていたジャズ・レコードのコレクションも高価なステレオも綺麗さっぱり処分してしまった。父親のお蔭でさつきもジャズが大好きであることにもかかわらず、それらのものをすべて処分してしまったことから、まず夫婦の仲が疑わしいものであったほか、夫や娘より惹かれている者、もっと正確に言えば、夫以外に心が惹かれている男がいた可能性が十分に考えられよう。またストーリーの終盤で、さつきがそれまで三十年ずっと心の底にしまっていた不愉快な記憶を、ガイドのニミットに白状しようとした場面、つまり上掲した後者の引用文「私の父があっというまに死んでしまったあとで、母は私にはひとことの相談もなく……」というさつきの語りかけた言葉を見落としてはなるまい。但し、さつきのその白状がニミ

臺灣大學學術期刊資料庫

ットに遮られたため、結局母親が何をしたのか不明のままであったが、途中まで話した内容と上述した父親のジャズ・レコードを直ぐ処分したことを考え合せれば、父親が亡くなった直後、母親が「ひとことの相談もなく」、不倫の男と再婚した、或は形がなくてもさつきと三人で一緒に暮らしたと推測できる。そして、その後「出し抜けに舞台が暗転し」、「すべてが悪い方向を向いてしまった。」(P.181)というさつきの回想及び(B)に挙げた「あなたが私の人生に対してしたこと」という恨みの含んだ語り、更に後のアメリカ人の夫と離婚した原因の一つはさつきが子供を欲しくないという叙述を合せて考えてみれば、その母親と再婚(あるいは同棲)した男がいつの間にかさつきを、加藤典洋の読み方に従えば、「たぶん凌辱」[16]したのであろう。その「凌辱」については 3.2 で論証するが、それに引き続き、その「義父」の子を身籠ったさつきに、子供を産ませるわけにはいかず、「さつきの妊娠した子供を中絶させた」。[17]「私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたこと」(P.129)というさつきの回想からでは、中絶は一回のみではなかった。そのような中絶——幼い命を潰した——という痛ましい経験がさつきの心に、妊娠＝出産、という一種の不潔や不貞、罪悪感などのようなトラウマになったのである。そのトラウマでさつきはアメリカの夫との間に妊娠をずっと拒絶していたという推測は合理的であろう。そのような心身の傷で、京都の出身でありながらさつきは、その京都に「十八までしか住んでいなかったし、それ以来ほとんど戻っていな」(P.181)かったとニミットに語っている。父親の死を一つの境として、それ以来ばりばり頑張ってきたさつきは仕事の面では成功している[18]が、それ以外の人生は暗くなり、いいことは一つもなく、どん底に陥っ

[16] 加藤典洋が「義理の娘であるさつきを、たぶんは凌辱し」たという見解を見せている。(加藤典洋『村上春樹　イエローページ　PART2』2004.5、荒地出版社、P.126)
[17] 同注 16。
[18] 離婚したことでアメリカを離れ、日本に帰るさつきを止めようとする同僚の「うまくいけばノーベル賞候補になることだって夢じゃないぞ」(P.178)という言葉から、さつきは研究において大変成功していることは明らかである。

臺灣大學圖書館資料庫

てしまっているのである。それらの記憶、母親への記憶の薄さ、或は触れたくない心境から考えれば、自分の人生を深淵の底に落としてしまった間接な存在はそのような母親だったと見なしてもよいのではなかろうか。

（二）さつきが 30 年恨み続けてきた「あの男」

世界レベルの甲状腺国際会議に参加した後、リラックスするつもりで一人だけバンコックに残っているさつきは、リゾートホテルに向かう途中、その期間中宿泊などすべてを手配してくれたガイド兼運転手のニミットに、「先月の神戸大地震ではたくさんの人が亡くなりました。」「ドクターのお知り合いには、神戸に住んでおられる方はいらっしゃいませんでした？」(P.181)と好意的に聞かれた。その質問に、神戸には「知り合いは一人も住んでいない」と、その場でさつきは嘘をついた。しかし、「神戸にはあの男が住んでいる」(P.181)とさつきは内心ではよく分かり、そこから初めて昔、30 年も前の記憶を徐々に具体的に思い出す。過去の時間の順番通りではないさつきの断片的な回想ではあるが、それを整理してみれば、「地震のすぐあとでさつきは彼の自宅に電話をかけてみた」(P.181)ほど、「あの男」の行方、もっと正確に言えば地獄に行くのを確かめたかった。しかし残念ながら、「電話は繋がらなかった」し、「あの男」は震災から逃れたらしい。そこで、上掲の（B）の引用文のように、「あの男が重くて固い何かの下敷きになって、ぺしゃんこにつぶれていればいいのに」「あるいはどろどろに液体化した大地の中に飲み込まれていればいいのに。それこそが私が長いあいだ望んできたことなのだ」(P.182)と、さつきは「あの男」を地獄に落ちるように呪い、憎み続けていたのである。そして、ホテルに着き、プールの畔で少し眠っている間、さつきはうさぎの夢を見た。

> 金網がはられた小屋の中で一匹のうさぎが震えている。時刻は真夜中で、うさぎは何かがやってくるのを予感しているようだった。彼女ははじめのうちは外からそのうさぎを観察していたのだが、気がつくと彼女自身がうさぎになっていた。彼女はその何かの姿を、暗闇の中にほのかに認めることができた。目が

臺灣大學學術期刊資料庫

覚めてからも、口のなかにいやな後味が残っていた。（PP.183、184）

夢ではあるが、その金網がはられた小屋の中にいるうさぎ、震えているうさぎの夢である。はじめは外にいる自分がその小屋に入れられているうさぎを「観察」していたが、いつの間にかさつき自身がうさぎになり、つまり自分が金網のはってある小屋に入れられている状況に変わったのである。ここでは1999年に発表された『スプートニックの恋人』の中の在日韓国人ミュウの遭遇を連想せずにはいられない。ヨーロッパに留学しているミュウがある夜観覧車に一人で乗り、一番高いところまで来たら、望遠鏡で近くにある自分のアパートを覗き、そこで誰もいないはずの自分の部屋で自分がもう一人の外人の男と激しく交わっている所を見たが、翌日血だらけの彼女が観覧車に倒れているのが発見され病院に運ばれたという一節である。つまりドッペルゲンガーという現象である。「タイランド」で小屋にいるうさぎを見ているさつきがいつの間にか自分が実は小屋の中に閉じ込められていることに気づいたのは正にドッペルゲンガー現象であるのは明らかであろう。「真夜中」「暗闇」「震えている」などの表現を見落としてはなるまい。更に、「目が覚めてからも、口のなかにいやな後味が残っていた。」という夢の描写の後に、「あなたが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあって当然ではないか。」 (P.184)というさつきの言葉が続いている。さらに父親が亡くなった直後、「母は私にはひとことの相談もなく……」という断片を合せて考えれば、前でも少し触れたように、母親がさつきの父親の生前に不倫関係の男と同棲か再婚したと推測できる。そして、「あの男」がいつの間にかさつきを「凌辱」した。あの頃のさつきは夜、常に金網がはってある小屋に入れられているうさぎのようで、震えていながら逃げられなかった。それはさつきの人生においては「暗闇」のなかで生活しているような苦しい経験であった。更に、「あの男」の子を身籠った時、男はおそらく自分を守るため、

臺灣大學學術期刊資料庫

中絶させた。それが「あの男」がさつきの「生まれるはずだった子どもたちに対してしたこと」であった。その憎しみでさつきは「あの男」を 30 年も憎しみ続けてきた。神戸大地震の時に、「何かの下敷きになって、ぺしゃんこにつぶれて」しまうことを心の中でひそかに期待していたのである。

（三）さつきが夫から受けた暴力

「あの男」がさつきの人生に 30 年も続いた恨みを招いたのみならず、さつきの結婚にも影を落とした。繰り返しになるが、何回も身籠り、何回も中絶させられたさつきの心の中には、妊娠＝中絶＝罪悪感が、妊娠への恐怖感、トラウマになったのである。そのトラウマがのち、アメリカ人との結婚生活にまで影響を及ぼした。妊娠が一種の「罪悪感」というさつきのトラウマが理解されず、子どもが欲しくないと夫に思われた。そこから、夫の不倫、ふたりの離婚に至ったのである。

しかし、結婚生活でさつきが傷つけられたのは離婚というアクシデントだけではない。夫が「音楽というとほとんどオペラしか聴かない人」で、「オペラ以外の音楽をかけると露骨にいやな顔をした」ため、さつきは「家には立派なステレオ装置が」（P.180）ありながら、長いあいだ大好きなジャズを聴く権利も与えられなかった。さつきにとってはおそらく趣味の自由を奪われたのも一種の暴力で、離婚に踏み切った引き金と考えてもよかろう。

（四）バンコックでさつきの「リラックス」とは

最愛の父親に死なれてから「すべてが悪い方向を向いてしまった」（P.181）という回想の通り、さつきの人生には暗い影が落とされている。アメリカでの不幸な結婚生活を含め、それらのすべての苦痛の元である「あの男」への恨みは、ガイドであるニミットも心の治癒師である老婆もはっきりと感じられるほど、さつきの表情や身体に溢れている。治癒師の老婆は「あなたの身体の中に石が入っている」、「白くて堅い石」、「あなたはきっと長年にわたってそれを抱えて生きてきたのでしょう。あなたはその石をどこかに捨てなくては

臺灣大學學術期刊資料庫

なりません。」(P.190)と、長年さつきの心に抱えてきた恨みを見出し、その「石」――恨み――を捨てなさいと強くアドバイスをした。久保田裕子は、不愉快な過去へのさつきの姿勢について、「一番大切なことを語らないというさつきの宿痾を浮かび上がらせ、怒りと憎しみという形でしか、過去を受け止められない彼女のありようをとらえている。」[19]と、その怒りや恨みの深さを語っている。一方、山田潤治は「生と死の問題が絡み、最後には眠ること（夢）による救いが用意されている。」[20]と、治癒師のアドバイスによる、その恨みの解消法の有効性を語っている。しかし、果たして山田氏の指摘のように、「眠ること（夢）によ」って、さつきの30年も抱えてきた恨みがそう容易に解消できるものであろうか考える余地はある。

本来学会が終わったあと、完全にリラックスするつもりで一人だけ残り、一週間リゾートホテルで過ごそうと計画していた。実際誰もいないプールを独り占めして気が済むまで泳くことができた。その時に限って身体はリラックスできた。しかし、それ以外の時間、わずかな間のうたた寝にしても「震えている」夢を見るのだった。さつきは身体がリラックスできたとしても、心はリラックスできていなかった。治癒師に告げられた「白くて堅い石」のようなものがいつも現れ、少しも和らぐことができなかったのだった。となると、このバンコックでの一週間は何の意味があるのだろうか。今回のバンコックでの体験で、さつきはニミットが聞かせてくれた北極熊の話――「相互コミュニケーションというようなものはいっさい存在しません」（P.194）――という牡熊の孤独のように、それまで自分の心の恨みを誰にも語らず、一人で抱えていたのである。ガイドであるニミットの誘導によって、誰かに語ったわけではなかったが、さつきは回想――心で自分との会話――することによって、その恨み

19 久保田裕子「言葉は〈出来事〉を超えることができるか――村上春樹「タイランド」論――」『日本文学』第61巻第8号、2012.8、日本文学協会、P.28

20 「「石」の正体は自分を子供の産めない身体にした男に対する憎悪であり、生と死の問題が絡み、最後には眠ること（夢）による救いが用意されている。」山田潤治「「神の子どもたちはみな踊る」村上春樹」小説」(『文学界』2000.5、文藝春秋、P.263

臺灣大學學術期刊論文

の実体を見詰めることができたのである。そして、帰りの空港でニミットに 30 年も抱えてきた恨みを告白しかけた途端、ニミットに遮られた。つまり、その恨みが解消できるまでまだ時間がかかるだろうが、混沌状態だった恨みが寝（夢を見る）ている間に起きたドッペルゲンガーなどの自己解剖、深層にいるもう一人の自分とのコミュニケーションを通して、少なくともその恨みの実体が明らかになり、その恨みをもう一人の自分と共有出来たことによって和らいだのではなかろうか。それがバンコックでの「リラックス」の働きと言えるのであろう。

四、おわりに

「アイロンのある風景」も「タイランド」も短編集『神の子どもたちはみな踊る』に収録されている、淡路阪神大地震を何らかの形で反映している短編と多くの研究者に読まれている[21]。小稿では地震という主題以外に暴力を一つの主題とする読み方を試みてきた。その暴力の根源やそれと向き合う主人公の姿勢、対策を以下のように纏めてみる。

（1）家族から蒙った暴力

「アイロンのある風景」にみる暴力：

家出をした順子は 40 歳位の男性三宅と儀式のような焚火をしているなか、自分の心に潜んでいた不快や不安を語ることができた。高校時代の身体の成長につれ、父親の視線の変質から順子が不快、一種の暴力を蒙ったことが明らかになった。一方、質素に独り暮らしをしている三宅も、家族への冷たい思い出や触れたくないその語り方及びずっと脅かされ続けている夢の内容を合わせて考えれば、

[21] 黒古一夫は「その被害や被害者そのものへ正面から向き合ってそこに生じている問題を表現化することなく、被害地でも被害者でもない人々の心的影響を取り上げるという「ズレ」の方法で地震がもたらした「暴力」を問題にしたのである。」「確かに、この連作集に登場する人々の内部（内面）は、作者の表現を借りれば「空っぽ」であり「空白」であり、そのような人間のあり方が横行していることと甚大な被害を出した「阪神淡路大震災」とはどこかで繋がっているのかも知れないが、」と『神の子どもたちはみな踊る』と地震との関連性について語っている。（黒古一夫『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』2007.10、勉誠出版株式会社、PP.232、233）

三宅も家族にかかわっている暴力、あるいは家庭に漂っている雰囲気から精神的暴力を受けていたと伺えよう。

「タイランド」にみる暴力：

高校時代に、最愛の父親に死なれたさつきは、母親の決定で、父親の代りに新しい「男」(「あの男」) が「家族」に加わった。それによって、さつきは実質的に性的暴力をさんざん受けた上に身籠った子を中絶させられ、心身とも深く傷つけられた。そのような心身的暴力がトラウマになり、結婚後、妊娠を拒絶したあげく、離婚する結果に至った。「堅い石」のような恨みでさつきは常に鎧を付けているように頑なな姿勢を構え、人生の苦しみに耐え続けている。

このように二つの作品を比べると形こそ異なるが、「アイロンのある風景」の順子も「タイランド」のさつきも「家族」からの暴力を受けている。その主人公の所謂暴力（「家族」からの暴力）が作品の軸となっていることで両作品が共通していると言えよう。ここで忘れてはならないのは父親や「継父」などの「家族」とは通常の家庭の家族とは限らず、再構築された「家族」も含まれている。そのような「家族」の多様性、「家族」から加担された肉体的であれ、心的なものであれ、これら隠蔽されている社会の一側面が垣間見られた。

（2）暴力に向き合う姿勢

家族とは、従来如何なる状況でも温かく包んでくれる存在だと思われるが、恐ろしい、悪魔のような侵略性も潜んでいることは以上の考察、分析で明らかになっている。

「アイロンのある風景」の場合：

ジャック・ロンドンの『たき火』の生と死のテーマの語りや焚火を起こすという儀式みたいなプロセスを通して、主人公順子は不快な記憶を思い起こし、変質した父親の「目つき」から受けた心的な暴力、そこから広がった破壊力から逃げた。一方、三宅の受けた暴力ははっきりとは語られていないが、「冷蔵庫」とか「アイロン」などの隠喩でその強い破壊力が表現されている。その暴力から順子も三宅も他所に逃げてきた。そして、儀式のような焚火を楽しむ

臺灣大學學術期刊資料庫

中で、順子は一時的心の中に新たに家族を再構築し、仮り家族の温もりに浸り、安らぎが得られたのである。

「タイランド」の場合：

それに対して、「タイランド」では、「家族」(「あの男」) の暴行による傷→傷から生じた恨みが 30 年間も心の深層に根付く→リゾート地で知り合ったガイドの誘導で、バンコックのリゾート地でもう一人の自分との会話を通して、じっくりとその恨みや暴力を見詰め、長年心に蟠っていた「堅い石」の解剖に至った。

許すまでにはまだまだ時間がかかるが、自分の心の蟠りを真正面から見詰め、その暴力を正視することを通して、心の痛みが緩和できたのであろう。

両作品とも、主人公が父親か「継父」といった「家族」から暴力を受けた。隠蔽されていた社会問題の一端が女性自身の語りを通して向き合うことができた。それへの対処として、「アイロンのある風景」の仮り家族の暫しの温もりや安らぎに浸る対応に比べ、「タイランド」のほうがその憎しみが強烈で許しがたいものの、じっくりと見詰め、心の深層にある自分と向き合い、対話ができるようなさつきの姿勢はより前向きになっていることも言えるのではなかろうか。

【付記】本稿は 107 年度科技部専題研究計画による成果の一部である。

【テキスト】

『村上春樹全作品 1990～2000③短編集Ⅱ』2010.1、第 2 刷り（第 1 刷り 2003.3）株式会社講談社

臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

浦澄彬『村上春樹を歩く――作品の舞台と暴力の影』2000.12、株式会社彩流社

加藤典洋『村上春樹　イエローページ　PART2』2004.5、荒地出版社

柄谷行人・福田和也対談「現代批評の核」『新潮』2004.8

川崎賢子・川本三郎　徹底討議「ふたりの春樹」『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第 32 巻第 4 号（通巻 429 号）3 月臨時増刊号、2000.3、青土社

久保田裕子「言葉は〈出来事〉を超えることができるか――村上春樹「タイランド」論――」『日本文学』第 61 巻第 8 号、2012.8、日本文学協会

黒古一夫『村上春樹　「喪失」の物語から「転換」の物語へ』2007.10、勉誠出版株式会社

小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』2010.10、株式会社講談社

椹木野衣「春が来る前に――村上春樹の新作を読む」『新潮』97 号、2000.4、新潮社

鈴村和成「村上作品の最近の黙示録的語調について」『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第 32 巻第 4 号（通巻 429 号）3 月臨時増刊号、2000.3、青土社

中山幸枝「村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論――「あちら側」と「こちら側」のはざまに位置する青年――」「近代文学史論」44 号、広島大学近代文学研究会、2006.12

丹生谷貴志「壜の中のメッセージ」『文藝』2000.5

堀江敏幸「もう神さまに電話はできない」『ユリイカ　総特集＝村上春樹を読む』第 32 巻第 4 号（通巻 429 号）3 月臨時増刊号、2000.3、青土社

村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000⑦　約束された場所で村上春樹、河合隼雄に会いにいく』2013、6（2003、11 第一刷）株式会社講談社

山田潤治「「神の子どもたちはみな踊る」村上春樹」小説」(『文学界』2000.5、文藝春秋

臺灣大學學術期刊資料庫

【ネット資料】

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9A%B4%E5%8A%9B

（2020.06.11 閲覧）

臺灣大學學術期刊資料庫